

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

叱り方の基準と期待値

同僚から、「初任者の〇〇さんは叱り方で困っているようです」と声をかけられました。

若い先生は叱られた経験があっても叱る経験は不足しています。言わば、叱る「初心者」です。そのため、叱ることで「人間関係を損ねるのではないか」「反発されるのではないか」と躊躇します。

実は、ベテランの先生も叱り方を戸惑っています。昔とった杵柄が通用しなくなっているからです。

今回は叱り方の指針となる2つのことについて紹介します。

1 叱る基準を設定する

授業中にお喋りをしているAさんを注意すると、「何で私だけ注意するのですか。Bさんはお絵描きをしているじゃないですか」と不満な態度を取ります。

Q1

先生ならこんな時にどう対応しますか。

- ①叱ることを諦める
- ②二人を同時に叱る
- ③お絵描きをしていたBさんを先に叱る
- ④お喋りをしていたAさんを先に叱る

①のように叱ることを諦めるのは先生が迷っているからです。自信がないからです。

授業に集中していないという点では、お喋りもお絵描きも同じです。子どももそう思っ

ます。しかし、自分だけが叱られることが不満です。

不満は反抗のあらわれでもあり、先生にとってはプレッシャーになります。それを回避するには「叱らない」という選択が無難です。

お絵描きをしていたBさんも叱りの対象になっていることに気づいたので、「教師の務めは果たせよ」と自らに言い聞かせられます。

諦めるのは指導放棄です。子どもは見捨てられたと敏感に察します。自分たちを見放す教師を信頼しようとは思いません。

同時に子どもは、「反発すれば先生は折れる」ことを学びます。今後、先生の言うことを聞かなくなりそうです。成れの果ては学級崩壊です。

②だと、平等にはなりません。先に叱られたAさんも納得し、不満は解消します。お絵描きをしていたBさんも同様です。叱り方を批判されたことを除けば、子どもからの信頼を失うことはないでしょう。

③のようにBさんを先にするのは、教師の逃げです。強く主張する方を選び、弱い方を選択したことになります。これは「言ったもん勝ち」のゴネ得を教えることになります。

はたして、④のようにお喋りをしていたAさんを先に叱ります。とはいえ、Aさんを先にする理由は、先生が感情に任せて自制心を失うことを承認するからではありません。

お喋りをしている子どもは自分が悪いことをしたという認識はあるので、叱られても仕方がないと思っています。しかし、お絵描きも授業規律という観点から見ると先生の叱責の対象になり、自分だけ叱られるのは不公平だと抗議しているのです。



子どもは叱られる原因に軽重があることを知りません。叱られると「何で自分だけ」と他者が見逃されることに納得できません。

そこで、心身の危険、邪魔、規律の3つの叱る基準を設けます。言い換えると、生命・社会・個人、です。

- ◆心身の危険(生命) 心を傷つける誹謗中傷と身体を傷つける暴力です。
- ◆邪魔(社会) 授業中のお喋りなど他人に迷惑をかける妨害行為です。
- ◆規律(個人) 生活のきまりや授業中のお絵描き・遅刻など個人に帰する行為です。これは他者に迷惑をかけません。

叱る優先順位は危険↓社会↓個人とします。これを先程のお喋りとお絵描きに当てはめるとAさんが先に叱られることとなります。

叱る基準は子どもたちと共有します。優先順位を書いて掲示しておきます。教師の叱りに反

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

発した時は黙ってそれを指差します。お絵描きをしていた子どもも雰囲気の変化を感じて、それを止めるのであえて叱る必要がなくなります。教師も感情に任せて叱らずに済みませう。

2 期待値は低めに設定する

漢字テストは満点を取ったら合格です。再テストの実施の有無は子どもの意思に任せています。

再テストが95点の子ども。前は80点だったので、15点アップしています。

Q2 先生はこの子にどんな言葉かけをしますか。

- ① 惜しい。あと5点で満点。次、頑張れ。
- ② よく頑張った。これでおしまいにしよう。
- ③ 15点アップ。努力の成果だね。

①のように惜しいか満足を決める権利があるのは、当事者である子どもだけです。教師が「惜しい」と言った瞬間、子どもはがっかりします。次に頑張るかどうかを決めるのも子どもです。教師の「頑張れ」は「もつと練習しろ」という意味だと解釈し、これまでの努力を否定されたと感じ取ります。

「次、頑張れ」と解答用紙を手渡された子どもは、「たくさん練習したんだけど……」と努力したことをアピールします。先生は、「満点を取ったら合格だから、また練習だね」と肩を叩き、励まします。子どもは、「また練習か」と意気消



沈みます。さらに、「何回再テストを受けたら満点を取れるだろう」と不安になります。「ひよっとしたら満点を取れないのでは」と自信を失います。

教師は「やればできる」と期待しています。これくらいは出来て欲しいという理想。教師にとっては当たり前レベルが、子どもにとっては高いハードルとなります。

期待値は先生の願望です。それを高めに設定すると落胆する回数や度合いが強くなります。現実と期待値の落差は失望感となり、叱咤となります。

②のように言われると、再テストを「やらされている」と感じている子どもは「これでテストから解放される」と安堵するでしょう。自身も得点がアップしているので満足感があります。

しかし、限界かどうか決めるのは教師ではなく子どもです。おしまいにするかどうかを決めるのも子どもです。満点を取っていないのに終

わりを勧められると、子どもは、自分が期待されていないと疎外感を持ちます。

③は得点アップという結果、練習という過程を認めただけです。先生の思いは含まれず、事実を伝えただけです。

それをどう解釈するかは子ども次第です。これでおしまにするか、再テストに挑戦するかを決めるのは子どもです。

教師の子どもへの期待を満足レベル・成長レベル・安定レベルの3段階に設定します。漢字再テストならば満点が満足レベル、得点アップが成長レベル、同じ点数は安定レベルとします。今回の再テストは満点(満足レベル)ではありません。教師はさらなる頑張りを期待しがちです。しかし、得点はアップし、成長レベルは満たしています。

仮に、再テストが前回と同じ80点だったとしても、「同じ」では成長とはなりません。現状維持です。言い換えると、80点ならいつでも取れる。当たり前レベルということ。定着です。

これが80点未満の時、教師は嘆くべきでしょうか。そうではありません。教師の期待値に子どもが到達していない時は、期待値をさらに下げ、取り組んだことを評価します。これを「挑戦レベル」と位置づけ、「先生は君が頑張っていることを知っているよ。その努力は明日への成功になるからね」と見守ります。子どもは教師から重い荷を背負わずに心理的な安心を得られるので、「頑張る」と自ら次の目標を設定します。自分で自分に期待するようになります。

子どもへの期待として肝心なことは、子どもが期待することを期待しないことです。教師が自らへの期待値を下げることで